



東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター  
潮田ヒューマニティーズイニシアティブ「公募研究 A」成果報告書

研究課題(和文): 海保青陵の主要著作の共同注釈

研究課題(英文): Joint production of a new annotated edition of works of Kaihō Seiryō

申請者名・所属先: 徳盛誠 大学院総合文化研究科

海外招聘者名: なし

### 1. 研究の目的

江戸後期の儒者海保青陵(1755-1817)の主要著作に、ミハヤエル・キンスキー氏(ドイツ・フランクフルト大学教授)と共同で詳細な注釈を付し、選集としての刊行を目指す。

### 2. 研究開始当初の背景

海保青陵は、江戸後期の社会を、庶民から大名に至るまであらゆる人が経済闘争に否応なしに巻き込まれる状況として把握し、その中での主体としての個の確立の必要とその具体的な方法を唱えた特異な儒者である。今日その思想的重要性は高く、その履歴や遊歴の軌跡も明らかになりつつある。多くが「～談」と命名されている青陵の著述はそれ自体が実践であり、青陵の思想はテキストに即してこそ十全に理解される特質をもつが、今日その重要性に比して著作はアクセスしやすいとはいえない。注釈付きの著作は日本思想大系本等に限られ、しかもそのいずれもが半世紀以上経過しているし、「～談」と名づけられた現存の著作のすべてが『海保青陵全集』(八千代出版、1976年)に翻刻されている意義は大きいですが、翻刻の誤りも少なくない。

こうした現状を踏まえ、本研究では、近年の研究成果を生かし豊富な注釈を付すことによって、青陵の代表的な著作を日本思想史のみならず、文学史、文化史、さらに西欧思想史からの検討にも広く開かれたものとするを目的とする。そのためには、日本と欧州という異なった学的基盤で青陵を研究してきた両名の共同研究がふさわしいと考えた。

キンスキー氏と私は2015年に京都大学蔵の青陵著作調査のワークショップ、2017年には青陵没後200年の国際研究集会を開催し、国内外の研究者のネットワークを作るとともに、注釈作成の意義を確認し、準備を進めてきた。私がこの間注目し研究してきた青陵の著作群の整理と分類は、選集を構成する著作の選択とその位置づけに活用できると考える。またキンスキー氏は近年、青陵の名著『稽古談』他の英訳と英語による詳細な注釈を学会誌に断続的に掲載しており、その成果の活用も期待できる。

### 3. 研究の方法

サバティカル研修期間(2022年4月1日~2023年3月31日)を利用して、私は2022年5月初めから2023年3月末までフランクフルト大学日本学科に客員研究員として滞在し、これまで注釈を付されることがない著作『洪範談』の校訂作業と注釈の執筆を行い、またそれと並行して、キンスキー氏と、思想史研究のありかたや方法といった根本的な問題から、青陵のテキスト解釈の具体的な諸問題に至るまで、議論を重ねた。2022年10月からは、日本学科の大学院生を交えて毎週1回の勉強会を開催し、執筆中の『洪範談』注釈の一幕を検討する機会を継続して持った。

徳川日本の儒者海保青陵の共同研究をドイツ、フランクフルトに滞在して行ったのは、以下の理由による。私



たちが準備中の選集の注釈は日本語でなされるが、キンスキー氏による英語注釈も参考にしながら、あたかも英語で書くように、内容としては欧米の読者にも読まれうるものを目指したい。具体的には日本思想史という脈絡に捉われず、できるだけ幅広い、多様なコンテキストから見たい。そのことが日本で広く読まれることにもなると考えるし、青陵理解としても、前述のように青陵の思想性が主張のみならず、言語実践そのもの（語り方、概念、参照する事物、等々）に内在することから、このような試みにおいてこそ、これまで自明視されてきたものを掘り返し、新たな発見が期待できる。以上の試みを実践するために、ヨーロッパ日本学の環境に身を置くことは積極的な意味があると考えた次第である。

滞在期間中、当初考えていたヨーロッパの日本学研究者との幅広い交流ができたとは残念ながらいえない。しかし上記の日常的な共同研究に加えて、関連する国際学会や講演会への参加は大きな刺激となった。さらに2022年10月から2023年2月まで、日本学科の学部後期学生と大学院生を対象としておおむね隔週1回開催した、日本における世界観の変容をたどるセミナーは、その毎回の準備と授業中の活発な議論を通して、私自身が自らの見解の基盤を相対化し、研究の新たな地平の可能性を知る大変有意義な機会となった。

#### 4. 研究成果

上記の共同研究と勉強会では、海保青陵『選集』の構成はほぼ固まり、『洪範談』の校訂作業と注釈は着実に進展した。2022年度中には完成に至らなかったが、勉強会はオンラインで継続し、2023年度内の完成をめざす。『選集』全体の刊行はその後になるが、実現を期す。

またキンスキー氏との議論は、近年の欧米における儒学研究の捉え直しの動きを踏まえつつ、思想史構築の方法、その分析概念など基本的な吟味に及ぶことも多く、具体的な成果には直結しないものの、今後共同研究をすすめる上で重要な足掛かりとなった。

2022年8月29日のヒューマニティーズセンターのオープンセミナーで行った、青陵『洪範談』についての報告はその後、考察をさらに深めていて、2023年度中に学会誌へ投稿予定である。

なお2021年11月26日開催のヒューマニティーズセンターのオープンセミナーでの報告「中世の『日本書紀』解釈における思想変動——一条兼良『日本書紀纂疏』を中心に」については、関連した論文を2023年刊行の『超域文化科学紀要』に投稿予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔図書〕 なし

〔雑誌論文〕 なし

〔学会発表〕 なし

〔その他〕

・ヒューマニティーズセンター第47回オープンセミナー「中世の『日本書紀』解釈における思想変動——一条兼良『日本書紀纂疏』を中心に」、オンライン開催、2021年11月26日。

・ヒューマニティーズセンター第77回オープンセミナー「海保青陵は動く——江戸後期の異色の儒者を捉え直す二つの視点」。ミヒヤエル・キンスキー氏（フランクフルト大学）との共同開催。「水源に向かって歩く——青陵の『書経』「洪範」解釈」と題して報告を行った。オンライン開催、2022年8月29日。